

幕末の漂流者

濱田彦蔵の自伝を読んで（5・4・17）

中川 努（昭15・文甲）

只今、御紹介いただきました中川でございます。「幕末の漂流者・浜田彦蔵」についてお話しすることになっていますが、私をはじめてこの「彦蔵」の名前を知ったのは、実は「漂流者」としてではなく、この人が日本に帰ってきてからの従事したことのある新聞の編集者、あるいは経営者としてのものでした。昔話を申しあげますと、学生のころ、私はジャーナリストになろうとして当時東大に「新聞研究室」というものがあって、その教授は小野秀雄先生でした。小野先生も三高の先輩だと聞き、名簿でしらべると、明治三十九年の卒業でした。この「研究室」はいまではおそらく大学附属の「研究所」になっているかと思いますが、ともかくそこにとまどき出入りして、小野先生のお話を聞いたりしていました。そのお話の中で「彦蔵」が日本の新聞の最初の刊行者だという話を耳にし、研究室にあった人名辞典で播磨の人物だということを知ったというような記憶があります。

戦後、たまたま筑摩書房の企画した「ノンフィクション全集」の中の一部として浜田彦蔵の英文による自伝を抄訳することになってはじめて「彦蔵」の周辺を調べるようになりました。これが切っ掛けとなって平凡社の「東洋文庫」の中に二巻の完訳を果すはこびになりました。

「浜田彦蔵」は播州の百姓の子で一八五〇年、たまたま漂流によってアメリカに渡り、いわゆる「ゴールド・ラッシュ」時代のアメリカにおける数多くの経験を積み、一八五九年彦蔵はすでにアメリカ合衆国の市民権を得て、やがてアメリカ公使となるべきタウンゼント・ハリスとともに日本に帰国します。「帰国」と申しましたが、「アメリカ人」として「米国領事館通訳」として日本に来るのです。「日米通商条約」が調印されたのが一八五八（安政五）年のことで、その翌年ということになります。

「彦蔵」という名前も、「来日」以来ずいぶん年数がたった後に付けられた名前前で、幼時に「彦太郎」と呼ばれていたらしく、アメリカでは「ヒコ」(Hico)で通っていたようです。

本日は、「彦蔵」が日本に帰って来て後の行動・業績はともかくとして、幕末の海に漂流した日本人としての経験・行動・そして彼を囲む人たちも含んで、日米の交流のはじまるころ、はじまった直後のありさまを中心としてお話ししようと思います。

日本人の「漂流」の話はずっと昔から語られています、特に最近とりあげられていますのは、鎖国時代に用事があつて船を出して、その船が嵐に遭つたりして海の向うへ出てしまった話です。

ある専門家によりますと、約二千五百人くらいの人が海の底に沈んでいるというはなしです。そして今、資料を残しているような人、あるいは業績を残しているような人というのは、まさに幸運中の幸運、なぜこんなことになったのかわからないというくらい、幸運だった人がわずかに残ったということでもあります。「アメリカ彦蔵」と呼ばれるようになった浜田彦蔵もこの中の一人でございます。その十年くらい前に、漁船で漂流した中浜万次郎（ジョン・万次郎）という人もこの幸運の仲間のひとりでした。

この彦蔵の伝記ですが厳密に申しますと二つあります。ひとつは一八六三（文久三）年に出た「漂流記」で、彦蔵のメモと日記を資料として口述し、岸田吟香と本間清雄が筆記したものです。彦蔵は日本語は普通に話せたようですが、日本語の本を自分で書くことはできなかったのです。う。

「おのれ相州の難風に漂いし時は、すでに魚の餌にもなるべかりしを、測らずも異国の船に助けられ、米利堅のサンフランシスコという所に連れ行かれぬ、……こと国の船々長崎、横浜に入りくることとなりぬ、これに便りを得て御国へ帰り来し時はその喜び筆にもことばにも尽しがたくなきありける。」

の「序」ではじまる二巻の和とじの本は一八五〇（嘉永三）年の漂流の始まりから一八五九（安政六）年、米領事館通訳として日本に帰るまでの「漂流」の記録から、一八五〇年代のアメ

リカにおける一日本人としての生活までこまかに誌されています。筆記者としての岸田・本間の文章のスピード感の漂う文調にも心を惹かれる漂流記です。

もうひとつは一八九二年とか九三年に出版された英文の自伝二巻です。つまり明治二十五六六ごろで彦蔵もだいぶ歳をとってからのもので、単に漂流や滞米の記述ではなくて、自分が日本に帰ってから、いろいろ経験したことも合わせて載せたもので、上下二巻、「ある日本人の物語」(The Narrative of A Japanese, 2 vols) だ。「この四十年間に見たこと・会った人たち」という副題が付いているだけに、最初の漂流者としての体験の部分はともかくとして、彦蔵と接する社会、個人とのかかわりあいのようなものが主眼とされているようです。日本で出版された英文の著書では一ばん初めではないかと言われています。英文の自伝の冒頭に

「私は日本帝国という島国に生れた。播磨難はりまがたに面した山陽道の播磨の国、古宮村こみやである。
……」

と記されていますが、この地は、明石と姫路との中間くらいのところの海岸の播磨町というところですよ。山陽電鉄の駅があり、古宮こみやという地名も残っています。そこには「浜田彦蔵の生れた所だ」という碑も建てられています。また彦蔵が有名になってから自分の祖先のためにたてた墓もあります。「彦蔵これ而建つ」というのが英語で書かれて、付近では「横文字の墓」といわれています。出生地に残っているのはその程度ですが、古宮の近くで彦蔵と一緒に漂流した人びとが

アメリカから持ち帰った一八五〇年代のサンフランシスコの古新聞がこの人びとの生家の天井裏から見付かったのは今から二十年も前のことだったと思います。

ついでに、一八九七（明治三〇）年に死去した彦蔵は東京青山霊園の外人墓地に「浄世ジョセフ夫彦之墓」という所で永眠しています。青山一丁目から入って五百メートルくらい行きますと大久保利道の大きい墓があり、その反対側あたりかと思えます。

一九五六年「ジョゼフ・ヒコ墓地保存会」というものが生れ、彦蔵夫人鋏子の遺骨が、青山の彦蔵の墓所に改葬されましたが、この保存会の主軸となったのが、現在、豊中市にお住いの近盛晴嘉氏です。近盛氏は大阪読売新聞の論説委員等をなさっていた方ですが、彦蔵のいろいろな歴史的事実を研究して、「ヒコ氣ちがい」の愛称までいたゞく熱心な方です。この方はアメリカからハワイまで、現地に赴いて事実を確かめて来た人です。近盛氏のお骨折りで「彦蔵の会」というのが出来てしまして、毎年彦蔵の命日である十二月十二日に青山の墓の付近で、資料の交換や懇親の会をしています。この会はアメリカにも支部を持ち、アメリカの文書館などからの情報蒐集もしています。

さて「漂流」の話ですが、これまでいろいろな立場から研究されてきましたが、鎖国という政策から生ずる日本の航海術の進歩のおくれ——というよりむしろ「退歩」ということも言われてきました。

なるべく船を日本の近海から遠ざけないような工夫は幕府による造船技術の制限、船の大きか
(石数)の制限もあります。わたくしども素人でもわかるものにキール即ち竜骨というものが全
くない船ばかり、いわゆる「平底船」みたいなものになる、さらに帆が一枚のものが普通で、後
から風が来ないと動けない、したがって「風待ち」の港というものが必要となります。

このような船はたゞ、いつもの山のみえる所まで行けば港の近くだとか、向うに見える岬の岩
の恰好で自己の位置をたしかめるくらいの沿岸航海が本来の航法であり、月や星の位置との関係
を計算に入れるなどの航法は、考えられないものだったのです。

日本の近海でも、今日は天気もよく、波もおだやかだから、沿岸の山の見えない沖をつつ切ろ
うではないかと欲を出たりするときに俄かに暴風が襲来し、漂流ということになるわけです。

「漂流」の歴史に詳しい荒川秀俊氏は、気象庁にお勤めだったので、北西風が吹きつるの
十月から十一月くらいが日本の舟が舵を失ったり、帆柱が傷いたんでとうてい自分では帰れなくなる
ようなことが多いのだと言っているらしいです。

船員たちは沈むまで何となく、傷ついた船の中で万一の生還を望みながら百日でも二百日でも
海の上を漂うということになります。

彦蔵の船、栄力丸も一八五〇(寛永三)年十月二十九日(陽暦で十二月二日)、遠州灘で突風
に襲われたのです。この船は「戦国船」という日本では最大クラスの船でしたが、江戸から帰る

途中、やはり南西風になやまされ、浦賀にしばらくとどまったが、ようやく「天気も晴れた。風も弱く、南東から吹いた。追い風だったので全部の帆をあげて気持ちよく進んだ。(三十日の)日が沈むころにも天気はどう見ても日よりがつづきそうだった……。」ので、船長(船頭)の万蔵は「伊勢の国の港に寄ることなく遠江の御前崎から紀州の大島まで、尾張湾または遠州灘を突切ってしまおうときめた」のでした。この船長の決意は、決して無理なものとは言えない、その証拠には「同じコースを、二百隻以上の船が進んでいた」からです。

しかし「夜の八時ごろになると、ひどく暗くなってきた。そして雨も降り出し南東の風は急に強くなってゆき、九時ごろまでには大あらしと」なってしまったのです。

この日から漂流がはじまるのだが、彦蔵は年若いのに毎日メモでもとっていたらしく、「漂流記」にはほとんど毎日のことが、米船に見付かる十二月二十一日まで克明に誌されています。主に天候のこと。しかし時折、その単純な消極的な日々の生活に色彩が施されるような記述もあります。

「十一月二十四日、西風和らかなり、およそ五時頃と覚ゆる時分遙に見るに、船に向い来るものあり、或いはいう、伊勢国磯部明神の我々を助け給わんがために来たり給うならんと、これに少しく心を慰め、皆々見る中に次第に近寄り、その形を見れば、大鱈鯨二足並び来たり、……。」
「十二月一日だった。何人かの者が千両箱をあげ金貨何枚か取り出した。そいつを船室に持っ

て行つて、金貨を賭けるカードを始めた。勝つ者・負ける者。ところが終わってみるとだれも金貨を集めようとしな。ふり向こうともしなかつた。余命いくばくもないことははっきりしているながら、仲間からふんだくろうと真剣になつたものだが、さて終つてしまえばお金は何の価値もないことがわかつて自分たちの取つたものにまったく無関心になつてしまふのだつた。」

打伏せて南無阿弥陀仏を唱える者もある中でアメリカ船の姿が突然にあらわれるのは十二月二十一日でした。水夫が一人で船の表にでて神を拝していると、遙か向うに白いものが見え、あれは帆影だとばかり、寝ていたものまで起して、だんだん近付いてくるのを見ると三本マストの白い帆、まぎれもなく外国の船舶でした。だが上に乗っている人々も、全くこちらとは違つた人々、黒くて大きい異様な船、異様な生きものを積んでゐる——だが助けられるチャンスは逃がすべきではないということで、この異人たちに向つて

「助けてくれ。助けてくれ」と叫ぶ。

向うからは手まねで「来い」「来い」といつているようです。

栄力丸の乗組みは十七人、この人たちを救つたのは米船オークランド号。救われたとき、はじめて異人種をまのあたりにした日本人はどのような印象を持つたでしょうか。それはこの人たちが日本に帰国して、長崎で取調べをうけるときの「漂流人口書」というものが語つてくれます。鎖国時代の漂流者は日本に帰ると長崎に連れて行かれ、長崎奉行所に「揚り屋」というものがあ

つてそこで審問を受けなければなりませんでした。

「揚り屋」というのは監禁所とか拘留所のようなところですよ。ここでとられる調査書が「漂流人口書」くわがきでいろいろのことが調べられ、もちろん踏絵もさせられます。この口書というものが長崎に相当に残っています、「漂流」の史料として現在役立っています。

この栄力丸の乗組員の米船との最初の遭遇は、

「何国の船ともあい知らず言語もあいわかり申さず候。異人十二人乗りにて、人体、日本人より大きく鼻すじ通り、色白き頬、髪下へとき下げ、耳のあたりにて切り揃え、黒ラシヤ頭巾を着し、衣服はラシヤ・ボタン付け、下はパッチを着し、一人おかしき者（どうも炊夫らしいのです）が唐人と相まみえ、頭、けし坊主（けし坊主というのはツルツルに剃ることでしよう）にて、なか剃り残しその髪を組み添え髪を致し二尺ばかり後に垂らし候。」

（米國漂流播州人口書）

で、ほゞその有様が想像できます。

英文の自伝の中にも一人だけ、清国人のcockが乗っていることが書かれています。

このcockが「日本」という漢字を書いたので、こちらが「そうだ」というと今度は「アメリカ」と書いたといっています。さらに何か書いたので、よく見ると「金山」と書いている、金山、金山というのはどうもサンフランシスコのことらしい、一八四八年にサンフランシスコの周

辺で金鉱が見付かり、アメリカ人が、あるいは外国人まで、東から西へおしよせる現象、いわゆるゴールドラッシュのおかげで、サンフランシスコは急に二十万人くらいの大都会になったところのこと、「金山」といえばサンフランシスコということになるでしょう。何日かかるかと聞いたら四十二日と答えたといっています。(サンフランシスコに着いたとき、この「四十二日」がぴったりあたったので、一同がびっくりしました)

言葉も通じない、異人種の船で先行きの不安がつのは当然ですが、オークランド号の乗組員が日本人の前で、しきりに plenty と言ったのは、どうも食糧は沢山あるから安心しろということだったらしいと彦蔵は後年の英文の自伝に書いています。

新しい環境に対する不安は、何処から襲ってくるかわかりません。このアメリカ船は生きた豚を船に積んでいました。そのうちにその屠殺の現場を見た日本人のひとり「おれたちも、いつかやられるのではないか」ひどく心配したという話もあります。

前にちよつと申しましたが、鎖国のおかげで航海術もあまり進歩しなかつたわけでしょう。この栄力丸の乗組員も、月の位置や星の動きで、自分の船の位置、緯度・経度をたしかめるなどということには、あまり縁がなかつたらしく、見張り所の乗組員が前方を見ながらいろいろ記録しているのを見て、あれは新しい、自分たちのまだ知らない航海術で、波の形を写し取っているのだらうと感心していたところ、それは英語の字形が *Mt. Wu* などのようなものが多いのが

波の形に見えたというわけです。

四つ足のものを食べたらいけないという躰けをうけているのに、食べさせられているのはほとんど四つ足ばかり。たべさせられて彦蔵も神様に申しわけない思いを持ったことを英文の自伝に書いています。

しかし、ともかく一八五一年二月三日という日にゴールデン・ゲートを通過してサンフランシスコに入港しました。

その日が、ずっと前に清国人の炊夫が言った四十二日目であったことはもちろんです。海の上から見る異郷の景色、それに心を奪われていると税関から税関長が来て日本人たちに「How are you?」と言ったらしいのです。それをみんなで「カワイイ!!」と言ったのだと受けとめ、よく話が通じるなあと感心していたらあとは全く通じなかったというようなこともありました。

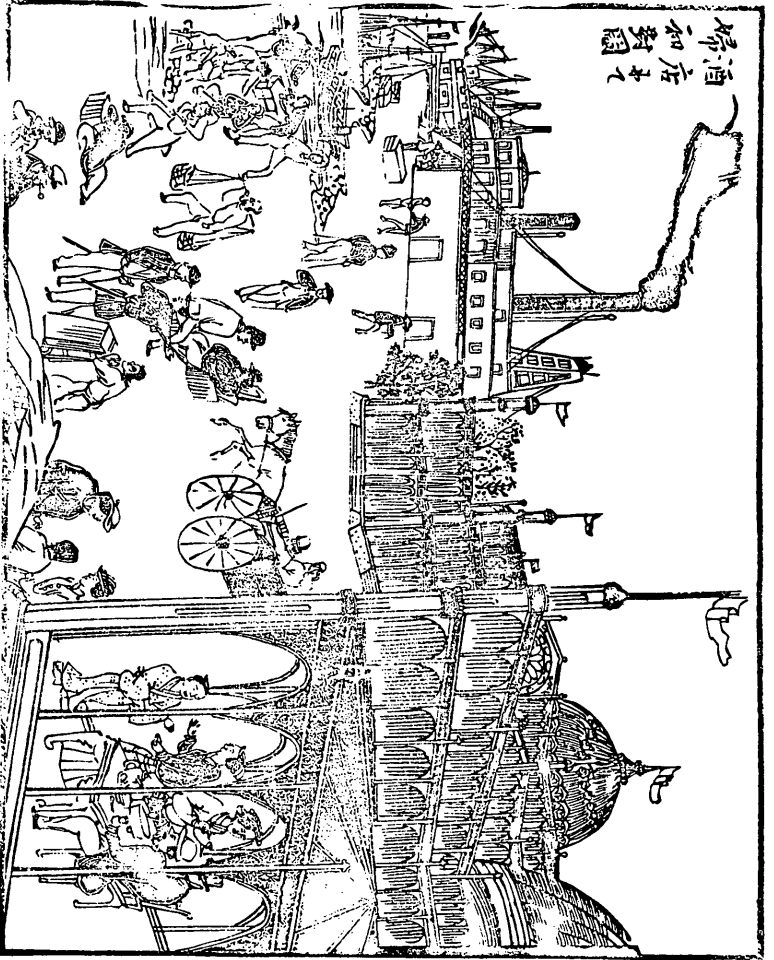
彦蔵がびっくりしたものは黒人奴隸でした。何といても当時十三歳、黒いものが車をひいて、目がギョロギョロしていて、あれはわれわれがよく話に聞く「鬼」というものだろう、そうだとすれば、もう地獄も近いのかというようなことまで考えます。まったく文化の違った国へ行くと、ほんとうに今日からすれば馬鹿馬鹿しいようなこともおこります。

ある夜サンフランシスコの船長と倉庫長が舞踏会へ連れて行きます。この待合室に入ると、自分たちと同じような日本人が、たくさん並んでいるので、此奴らはいつ来たのだろうと思って、

こちらから「バー」と呼びかけても何とも言わない——。それは向うの大きい鏡にうつつていた自分たちの姿だったのです。姿見の鏡などというものは当時あまり普及していなくて、自分自身の姿でもあまり見たことのないというようなときには、こんなことも起るのでしよう。

当時アメリカは、西の方が景気がよく、開発の最先端ともいうべき、フロンティアといわれるものが、西端まで延びてしまつて、遂に海に没したなどと言われた時代でした。アメリカ人の眼の多くが、東側つまり大西洋側ばかり向いていました。この時代からアメリカに「The Another Side」が出来ました。一八四九年あたりから、所謂ひと山あてようとこの地に入りこんで来る人たちは、多少の軽蔑と羨望をこめて「四十九年人」forty-ninersと呼ばれたものでした。あのアメリカ人的な、こだわらない明るさ、新しいものに対する異常な興味などという特徴は、この時代、この地で出来たのではないかと思わせます。少くともここで非常に発達したことはまちがいないでしょう。

そのような時期にサンフランシスコに居た栄力丸のグループは、ある日「芝居小屋」につれて行かれます。そして待合室で腰を下してしばらくお待ち下さいと言われて待っていると、一方の壁と思っていたのはカーテンでみんな舞台の上を上らせられていたのです。観客席から人びとがたくさんならんでこちらを見ている……「おれたちは見せものではないぞ」とみんな怒ったのですが、「いのち」を助けていたと聞いたのだから、まあいいではないかという船長万蔵の判断も



婦酒
店
和
對
蘭

サンフランシスコ、酒店にて

あつてそのまま何もしませんでした。

しばらくして降りて一般の見物人と一緒のところへ行ってくれといわれて、舞台を降りて下へ行くとそこで歓迎され、菓子折をいただいたり、洋服をプレゼントされたりして、先ほどの怒りもふっ飛び、とてもよろこんだようです。

彦蔵は船に乗っているときから、比較的利益発で、歳の若いせいもあつて顔もかわいかったせいか、かわいがられて、洋服をいちばんはじめに着せてもらったのは彼だったという話も書いてあります。しかし鬚まげを切られたのも彦蔵でした。これは、泣くような悲しみに身を包まれたのと、日本に無事に帰ったら鬚を切つて神様に供えますといつて「願」をかけておきながらそれができなかつたのが悲しいと書かれています。

一方で、この漂流グループを使って、日本との国交を開きたいという方針がこの頃アメリカの中央政府で内定するのがこのころでした。このグループはサンフランシスコで何となく日日を送つていたようです。給料もいくらかいたただきながら、その働き場所もさまざまでした。

一八五二（嘉永五）年三月十三日に栄力丸乗組みの十七人は、サンフランシスコからアメリカ船セント・メリー号で日本に送り帰されることになりました。

実は、この船（栄力丸）の連中を日本に送りとどけることによつて日本との国交を開く端緒を作ろうという提案がなされ、ほどなくペリーの艦隊が行くから、香港あたりで、日本人を艦隊が

引き取り、日本まで連行するという計画がすでにできていたのです。

一行は四月三日にハワイ、当時の「サンドウィッチ諸島」に着きますが、到着した朝、漂流以来、乗組員のめんどろを見つづけて来た船長の万蔵が死んでしまったのです。一同は簡単な葬儀をすませ、大きい石を新しい墓の上に置き、ひざまずいて拝礼しました。万蔵は六十三歳で、たまたま彦蔵と同郷の播磨・古宮の出身であっただけに、彦蔵には、悲しみもひとしお深かったらしく、この日は「はるかに望む海は静かで、鏡のようになめらかだった」と墓地の感懐をとくに自伝に誌しています。

香港着の予定は五月二十二日ということになっていましたがここでひとつの事件がおこります。セント・メリー号の下士官トマスという者が彦蔵に、「もう一度、お前はアメリカに戻ったらどうだ。あちらで就職するのもいいではないか」という提案をしてきたことです。彦蔵はとくに、他の者より英語の勉強に熱心であったこともありましたが、年も若く、頭もよさそうだったためかもしれません。

それにしても、誰か優秀な「働き手」を自分の周囲に得たい、そして、その条件さえととのえば、どこの国の人間だっつかまわないという考え方は、いかにも当時のひたすらに前進するアメリカの、そしてアメリカ人の考え方を示しているようでもあります。

大きい問題をつきつけられた彦蔵は何と返答していいのか、困ってしまったのですが、

結局、ひとりだけ残るのはいやだといって「カメ」と「トラ」と一緒だったら、という条件を出し、そのとおりになります。日本文で書かれた「漂流記」においても「次作」(トラ)と「亀藏」(カメ)をも同道せん。とあって「香港より英船に乘組み、共に出帆す」とあります。

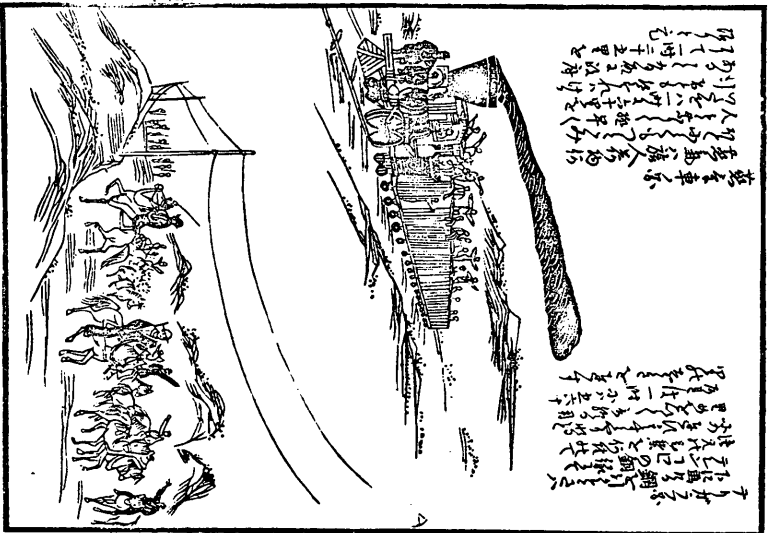
これから、彦藏の独特の人生が始まるのですが、そのきっかけとなるのは、サンフランシスコ到着の日(一八五三年六月二日)に、当時の税関長ビバリ・C・サンダースに会ったことでした。サンダースは、彦藏に会った日から彦藏を自分の生地である東部の本邸に連れて行き、そこで学校に入れてやろうと決意していたようです。これに対して、彼を連れて来たトーマスは、それはやめろと言ったのですが実は、このトーマスは香港からの旅費その他、八十ドルを彦藏のために立替えていたのでした。彦藏はうっかりしていたが、サンダースはトーマスに「東部の学校に入れるので……。」とトーマスの立替えをことごとく負担することを約束し、トーマスも賛成したのです。「こうしたことは、ずっとあとになるまで、まったく知らなかった。あの老紳士は、彼独特の心のひろい気前のよさを發揮して、この取引きについてけっしてひとことも口に出さなかつたからである。」(英文・自叙伝)

サンダースという人は、税関長としてのほか私営の銀行を經營している、相当の財産家でもありました。その心のおおらかさ、決断の速さなど、ちよつとわれわれには理解できないところもあります。これも当時のアメリカ人の考え方を表しているのかも知れませんが。

こうして彦蔵は「東部」のボルティモアのサンダース邸にひき取られるのです。ボルティモアは、合衆国の首府ワシントンから五・六十キロメートル北の町で一八五三年七月初めにサンフランシスコを出てカリブ海を船で渡りニューヨークに着いたのは八月五日でした。

サンダースに引きずられながら、彦蔵は見るものがすべて新しいものばかりなので、どうしていいかとまどうほどでした。蒸気機関車はアメリカでは急速に普及するのですがこの頃はまだワシントンとニューヨークの付近だけを走っていたようです。

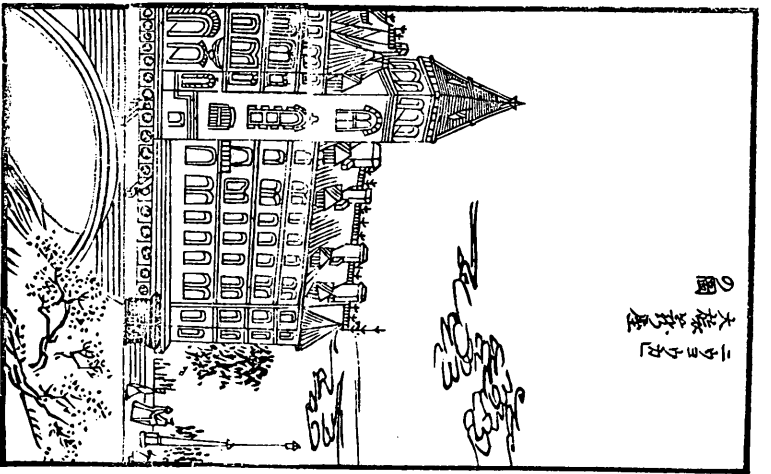
それよりもっと彦蔵をびっくりさせたのはテリグラフ（電報）でした。ニューヨークのホテルから二百マイル離れたボルティモアの自分の家に、「自分がいよいよここに着いたこと、翌日には帰宅することを知らせねばならぬ。二十分くらいでその返答が来るだろう」というサンダースの言葉を、彦蔵はとても信じられませんが、きつと自分をおどろかせるために冗談を言っているのだろうと思ひながら笑つてると「ちよつとついて来ないか」という、行つてみると、事務所の帳場に男がいてサンダースが一枚の紙に何が書き入れてその男に渡す、男はひとつの機械を動かしはじめたがカチャカチャと音がするだけで何が何だかわかりません。しばらくサンダースが新聞を読みながら待っていると帳場から、さっきの男が手紙を持って来て、サンダースにさし出すと、サンダースはそれを読んで、「明晩、義弟がボルチモアの駅で私たちの到着を待つ」と書いてあ



蒸氣機車ノ
 發明者ハ
 瓦特ニシテ
 英國人ナリ
 其ノ發明ハ
 一八二五年
 頃ニシテ
 行ハレタリ

電信ノ發明者ハ
 伏打ニシテ
 英國人ナリ
 其ノ發明ハ
 一八世紀
 頃ニシテ
 行ハレタリ

蒸氣機關車・テリガラフ（電信）



ニウヨーク
 大旅館ノ
 圖

ニューヨークのホテル

るといのです。彦蔵は「手紙が鳥よりずっと速く飛ぶのだろうか」と不思議に思うのですが、翌日ボルチモアに着いてみると、ちゃんと義弟が馬車をもって迎えにきていたのです。

サンダース家の家族も、みな彦蔵を大切にとりあつかい、それに夫人は、いろいろのめんどろを見てくれ、一八五四年には夫人の世話でカトリックの学校に入ります。そしてその年の秋、洗礼を受けることになります。彦蔵自身書いているのですが、いろんな名前前の見本がありどれがいいか、お好みのものをといたのだが、あまりいいものはないような気がした、しかし「ジョゼフ」というのがまあまあだったのでこれにした……と。

つまりこれで彼のアメリカ名は「ジョゼフ・ヒコ」となるのです。そして、また、サンフランシスコに戻って会社に就職するのですが、やはりサンダースの世話で、ある上院議員に連れられて、またワシントンに出かけて、第十五代大統領ジェイムズ・ブキアナン大統領に会います。彦蔵は、四年前の一八五三年、サンダース家に来たばかりのところ、やはり、サンダースに連れられて第十四代のフランクリン・ピアース大統領に会っています。さらに、日本に帰還後、ふたたび渡米したとき、國務長官シーワードとともに、有名な第十六代、アブラハム・リンカーンに会っています。普通の日本人で三回もアメリカ大統領に会うなどというのは、偶然とはいえなかなかあり得ないことですが彦蔵はそのたびごとに、日本の大名や高級武士のものものしき、とりまく警備の厳重さにくらべて、アメリカの大統領の「屋敷」がいとも容易に入ることができ、大統領自

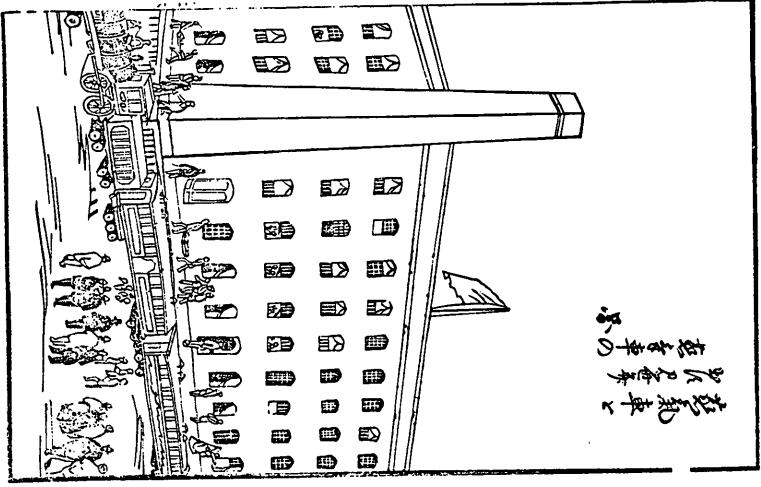
身の人あつかいの気安さに感じ入ったようです。たとえば日本文の「漂流記」の、ピアス大統領のところへ、サンダースに案内されるところは、

「……大なりといえども、商人の家にもかようなの大家あり、ただ柱はその外とも白色の蠟石を以て造り、技構美麗を尽くせるを常人の家と異なりとするのみ……下男一人出て取り次ぎをなし座敷へ通るべしとあるによってサンダースとともに入る……大統領自身立ちて我々を迎い入れ手を握り礼終りて、サンダースより我がうえを告げれば、我か手をも握り、自ら腰かけを持ちて我を座につけ……」とあり、国で一番偉い人が、いとも簡単に一漂流外国人にこだわりなく接するなど、彼にはとても考えられなかったことだったのでしよう。

さらに一八五八（安政五）年の六月、サンダースの世話でアメリカ市民権を得ているのです。これでアメリカ人「ジョゼフ・ヒコ」が誕生し、「日系米人第一号」となるのです。当時アメリカのいわゆる市民権（Citizenship）の獲得は、法律では白人でないといけないとか、自由人であること、つまり奴隷ではないけないとかいろいろあったようですが、どういうわけは彦蔵は「市民権」をもらっているのです。「日本人」という状態でそのまま帰ると、どんな目に遭うのかという事情がサンダースには十分にわかっていたようです。何かの「コネ」で本当は法律上できないのに、サンダースの「顔」で取れたのではないかと思われるふしもあります。

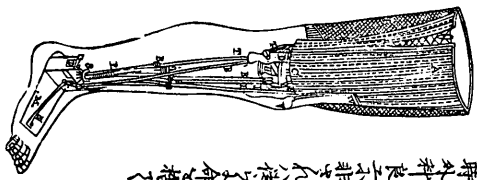
このちようど一ヶ月前に、アメリカで彦蔵と親しくなっていたキャプテン・ブルックという軍

蒸氣車と
 以て名乗る
 蒸氣車の一



蒸氣車駅

炮丸小費り或ハ脱疽其他挫我亦之豆ヲ破傷之ニレノ為ル
 終ニ亡命せんとも若シ其擲セリ捨テ冬ニ豆ニ造リ用
 生ハ康健ノ者小同ノ勅作宜致申此細工致羅器始ハ昔
 中者リ之間之とも未ダハ合上ノ殊ル眼前見テ致
 些寂小出ニ若年戦ル有時々科良ニ非ラレ徒々命ヲ捨テ
 疾癘父々之



義足 (メキシコ戦争中)

人の測量船に乗り組むことになっていて、ほとんど日本行きがきまっていたので、サンダーズが、「市民権」獲得に力を入れたことも理解できるような気がします。

彦蔵はブルックの船、「クーパー号」でサンフランシスコを出港、太平洋の測量を行なうのですが、数ヶ月でブルックに別れ香港行きの船に乗り、一八五九年香港に着きます。

この香港で彦蔵は、前のアメリカの日本駐在の総領事で、こんど新設された駐日公使となったタウンゼント・ハリスに紹介されることとなります。さらにハリスがすでに新開港の「神奈川」の領事に任命していたドルから領事館付きの通訳への就任をすすめられ、それをひきうけることにしたのです。

そしていよいよ「アメリカ市民」として、ミシシッピー号で、長崎へまず入港し、さらに下田、神奈川へと「来日」するのです。

本日の話しは、「漂流人」としての彦蔵の経験を中心としてお話いたしました。彼の前には「来日」後の変化の多い、そして彼としては楽しいと同時に相当に重圧を感じる四十年の人生が横たわっていました。そしてその中には、日本の近代の曙ともいふべき幕末・明治維新をふくむ数年間、そしてこの期間こそ、彦蔵が日本を動かす歴史の歯車の近くにいた、あるいはその歯車のまわるのに手を貸したと思われる数年でありました。

「アメリカ人」としての「来日」は、あるいは彦蔵の生命を保つものだったかもしれません。

一八六〇（万延一）年、井伊直弼が襲撃されてから、攘夷派の火の手はなかなか衰えず、江戸高輪の東福寺のイギリス公使館襲撃などに見られるように、外国に関係する日本人の生命はあやういものでした。しかし彦蔵は、「アメリカ人」であつたおかげで生命を大切にまもられていました。横浜である雑賀屋の風呂に入れてもらつたら、この土地の役人が部下をつれて客間にすわっている、ここで何をしているのだと聞くと

「あなたが風呂に入りに来るといので身辺を護衛するように上司からじきじきの命令を受けているのだ」と話した……………」

彦蔵はこのようなときに、かつて恩人・サンダースの力添えであたえられた「市民権」の重みをはたしてどのくらい感じたでしょうか。

幕府の衰退から「王政」のはじまる明治初年にかけて、彦蔵は、身分の上下を問わず、いろいろの人びとから、アメリカの新知識を求められ、それ対して積極的に応じて、多くの場合、それが「文化上の貢献」ということに繋がっています。「新聞刊行」などもそのひとつです。しかし、日本にしばらく住んでいると、「外国人」なるがゆえに苦しい心情を経験しなければなりませんでした。

「……亜国に恩人・信友を多く其上異国の言語・筆算は日用に差支えなし。日本の事は習いなければ、事毎に差支多く、又差当り生計の目当なく、乍去父母の国なれば、異国の人別にて

終らんも本意ならず。希くは日本の読書よみかきをも学び、時を得て日本人別に戻り、亜国と日本の両間に在て両国の為に微功をいたし、国恩を報ぜんと願うばかりなり」

この「文久三年秋月、播州彦蔵しるす」の序を持つ「漂流記」は、その「亜国」への賞讃と同時に生国日本への断ち難い絆を見るとき、このあたりを機として生き方に対するひとつの転換とみることもできます。

彦蔵の後半生を見ますと、日本に住むことにより、日本人の妻を迎えて、日本人になったように思ったかもしれません。また本人は日本人になろうと勉めたことでしょう。しかし「亜国」の風習に馴れ「日本のことを習いな」い人物は明治の日本で生きることとは必ずしも容易ではなかったようです。

本日は、彦蔵の「漂流者」としての姿についてのみ、お話し申しあげ、日本における生活は、時間的にも、中にはいれなくなりましたので、今日はこれくらいで終らせていただきます。御静聴ありがとうございます。

(大阪大学名誉教授・摂南大学名誉教授・梅花短期大学講師)